

変幻自在の音楽性

二階堂和美というアーティストの面白さは、その音楽性の振り幅の大きさだ。弾き語りから大編成の楽団、しっとりとしたバラードから迫力満点の曲。オリジナル曲はもちろん、カバー曲も自分の土俵で料理する表現力の豊かさ。さまざまな表現方法にチャレンジを重ね、一つの到達点に達したのが、2011年に発表したアルバム『にじみ』。彼女の代表作ともいえる作品で、ある音楽雑誌では、2010年代前半のJポップのアルバムベスト100で堂々の2位に選ばれた。近作の『GOTTANI』では、ビッグバンドをバックに歌い上げる一面を見せる。

「大きなバンドを従えて歌うというスタイルにずっと憧れていました。ようやく実現でき、自分にとっての真骨頂ってここにあったなあと思いました」。

ソロだからこそ、自由な形態で変幻自在に活動の幅を広げることができた彼女だが、最近思うことがあるという。

「ライブばかりやっている」と、どうしても創作ができななくなりがち。それが欲求不満

になっているんです。個人的な事情としては子育てがあり、創作はどうしても後回しになりざるを得ません」。

ライブは自分の中のものや作品を産むための充電期間が必要と感じているようだ。

紅白の舞台にも

彼女の道のは決して順風満帆ではない。大学卒業後に上京。コッソツと作品を発表するものの、日の目を見ない時期が続く。一部のマニアや音楽関係者には注目されるが、一般的には受け入れられない実験的な作風であった。

このまちで暮らしている誇りが、大きな力になる。

— 地方で活動するミュージシャンとしての意識 —

二階堂和美さん（シンガーソングライター・僧侶）

ともあって、初めて会った気がしなかったです。緊張はしましたが、「お互い気が合うのに決まっている」というような何だか答え合わせをしたみたいな感覚でした。映画の歌のことも、ごく自然に託していただいたような感じでした」。

主題歌の録音は広島のアジエで行われ、高畑監督も立ち会った。このとき彼女は妊娠中。おなかの中には新しいいのちが宿っていた。そんな中で『いのちの記憶』という歌もこの世に生まれてきた。

「この曲で、がぜん認知度が高まり活動の幅が広がりました。一方でこういう歌の人だという色が付いてしまったところもあります。でも、それまでの活動がしっかりあったので、変なブレかたはしないうですみました。作ったときは『千の風になつて』みたいに売れたらどうする!と思っていました笑」。

昨年4月、高畑監督はこの世を去った。監督との出会いによって生まれたこの曲を彼女は振り返る。

「僧侶としても、母としても、子としても、どれに照らし合わせてもうそのない曲。私の人生にとっての宝です」。

ふるさと大竹を思う

進学のためふるさと大竹を離れた彼女。その後東京で暮らすようになり、住まいに選んだのが果嶋。おばあちゃんの家として有名な地であり、年配の方が多く訪れる場所だ。懐かしさを感じられるように、お年寄りに囲まれた街がいいなと思つて住み始めた。しかし大竹のお年寄りとはまるで印象が違った。自分のことを知っている訳でもなく、言葉を交わす訳でもない。かえって孤独感をつのらせる日々だった。

「ふるさととは重荷だと思つていたところから、帰る場所受け入れてくれる場所というありがたさに変わっていききました。今も揺るぎない根っこだと感じています」。

『女はつらいよ』という曲のミュージックビデオは、近所の小瀬川沿いで撮影した。彼女はもつと田舎らしい風景のところで思つていたが、撮影スタッフは「ここがいい」と気に入ったという。この映像を見た国内外の人から「実家に帰りたいくなった」という声が寄せられた。何の変哲もない風景だが、図らずも反応があったことに驚く。

「ここが私のふるさとだと受け入れ、ここで暮らしていることの誇りが、大きな力になりました」。

かつては創作活動のために、東京に出ていかなければならない時代だった。今はインターネットの普及などで、地方から発信することのハードルが下がってきている。

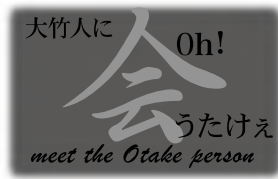
「ミュージシャンが地方に暮らすとか、日常にまみれながら活動していく。そのモデルケースの一つとして二階堂和美という存在がある。そんな自分の立ち位置を意識するようになった」。

負って抱えて

今年の1月に『負うて抱えて』という本を出版した。新聞連載のエッセイをまとめたものだ。

「ここには歌からは見えてこない素顔の二階堂和美がいます。ステージでは自由奔放みたくて、こんな悩みを抱えているのだと知つても、何かの励ましになればいいか、何かの背中を押すという思いです。というか、大竹の方だと、むしろステージを知っている方より、普段の私を知っ

スタジオリブのアニメ映画『かぐや姫の物語』の主題歌『いのちの記憶』や吹奏楽サークルと放課後児童クラブの子どもたちと一緒に作り上げた『大竹で生きている』でおなじみのシンガーソングライター二階堂和美さん（45歳）。僧侶とアーティストという顔を持つ彼女に、近年母というもう一つの顔が増えた。大竹の地に暮らしながら創作活動を続ける彼女に、今の心境をお聞きした。【取材 企画財政課】



夫の敦さんは、ベーシストとして一緒に活動中。5歳の長女と1歳の長男に恵まれ、子育て真っ最中のお母さんシンガー。



2月10日の「おおたけ吹奏楽団」との共演では『大竹音頭』も披露。会場をおおいに盛り上げた。



右上から時計回りに、カバーアルバム『ニカセトラ』、弾き語りの『solo』、ビッグバンドと共演『GOTTA-NI』、音楽誌で高評価『にじみ』



1月に出版したエッセイ集『負うて抱えて』は、彼女の日常がつつづらされている。2011年出版の『しゃべったり書いたり』は、雑誌のインタビューなどをまとめたもの。

二階堂 和美【にかいどう・かずみ】

1974昭和49年生まれ。元町の寺院に生まれ、自身も僧侶の資格を持つ。1999年アルバム『にかたま』でデビュー。その後も数々の作品を発表。フジロックフェスティバルへの出演やスコットランドツアー、映画出演など精力的な活動を経て、国内外で人気を得る。作品に2013年映画の主題歌『いのちの記憶』、2015年被爆70周年プロジェクトテーマ曲『伝える花』、市制60周年記念イメージソング『大竹で生きている』など。自動車やインスタントラーメンのCMでもその歌声を披露している。今年デビュー20周年を迎える。

世の中のこと、家族のこと、いろいろなものを「負うて抱えて」いる私たち。みんな大竹で生きている。